

1966年のサンレモ出場前に、オーラは3回に渡ってテレビ・ショーの主演を務めた。「Io, Gigliola (意:私、ジリオラ)」というタイトルのオーラの特番だった。1月8日の土曜日から22日の土曜日まで放映された、派手な演出を避けたバラエティ番組で、“適齢前 (Non ho l'età)”に成功を手にし、アーティストとしての頂点を望む若い女性でありながら、18才の女の子でもあるオーラの、率直なモノローグを意図して制作されたものであった。オーラは持ち歌のヒット曲を歌った他に、2曲の新曲を発表している。それはアイ・ノウ・ア・プレイス (Un bel posto)」とエンツォ・ヤンナッチが書いたとても美しい曲「花は枯れて (Sfiorisci bel fiore/後にフランス語盤も録音される)」であった。さらにブリジット・バルドーやマリリン・モンローを真似て踊ったりして、ヴィルナ・リージ、ヴィットリオ・ガスマン、モニカ・ヴィッティ、レナート・ラシェルといった大物ゲストたちをもてなしている。



ショーが終わった次の土曜日、オーラは再びサンレモにいた。“年端も行かない (non ha l'età)” “少女というレッテルを払拭し、“ああ、なんとあなたを愛しているのかしら (Dio, come ti amo)” と言って、男性に愛を打ち明けることができる女性に成長したのだということを観衆に示したかったからだ。この曲の作曲者はドメニコ・モドゥーニョで、オーラに提供することを考えながら曲を書いたと後に明かしたくらい、この少女の人間性をとても信頼していて、批評家もその選択を認めていた。モドゥーニョに対してこんな表現を使ってでも。

《もしモドゥーニョが再びサンレモで優勝することがあるとすれば、今回はジリオラのお手柄だ》

1966年はサンレモ音楽祭にとって険しい年となった。イエイエ族と長髪族が流行し、審査委員会は特に若い人たちが構成された。そのため“過去の栄光”と伝統的なメロディのカンツォーネにとっては、あまり希望がないのではないかと心配されたのだが、まさにこうした曲が勝利を取めたのだ。国民的スターのミンモコとドメニコ・モドゥーニョとオーラは予選で4位につけ、決勝まで進んだ。オーラは、金の糸で刺繍された白い衣装を着て、前髪にウィッグをつけて、トリを務めた。それは大成功となり、この「愛は限りなく (Dio, come ti amo)」は優勝曲になったのだ。



勝利のアナウンスでモドゥーニョは熱狂して、オーラに抱きついて持ち上げたので、オーラのスカートは、危ういほど捲り上げられてしまい、カメラマンたちが撮ったその一枚の写真は世界中を駆け巡り、この出来事を不朽のものにしたのだ。イタ

リアで「愛は限りなく」は、オーラのヴァージョンもモドゥーニョが歌ったヴァージョンも、どちらも最高のヒット曲となった。しかし同曲でユーロビジョンに出場したモドゥーニョはなんと最下位で、ヨーロッパではまったく受け入れられなかった。それゆえオーラの任務は、カンツォーネの未来を再び元気づけることになった。オーラは世界中を回って、見事にその任務を果たしたのだ。そして様々な言語でレコードを吹き込んでいる (フランス語盤、スペイン語盤、ドイツ語盤、日本語盤まで発売されることになる)。

『愛は限りなく』は、オーラに映画の門を開くことになる。当時はスター歌手の映画が盛んに作られており、オーラが初めて絶対的主役を演じる映画出演となった。スペイン人の友だちの彼氏と恋に落

ちる、ナポリ出身の若い水泳選手の役を演じている。彼女と共演したのは、すでに歴史に残る何本かの映画に出演しているマーク・デイモンやニーノ・タラント、ライモンド・ヴィアネッロ、カルロ・クロッコロ、アントネッラ・デラ・ポルタといっ